モーリス・ドニのアラベスク論

―― 活動初期における「象徴的装飾としての絵画」の探究

慶應義塾大学　吉原 里花

モーリス・ドニ（Maurice Denis, 1870-1943）の作品制作と著述活動は共に 1890 年前後に開始された。アラベスク（Arabesque）はこの出発点において提議された重要な概念である。実際、1890 年代前半の絵画作品では、対象の外観を忠実に再現することを離れ、曲線そのものを強調する表現が集中的に試みられた。同様の傾向はナビ派の作品に広く確認でき、当時の批評にはアラベスクの語を用いてその曲線を賞賛する記述がみられる。一方、1890 年に発表され、こんにちモダニズム絵画の宣言として定着している「新伝統主義の定義」にはこの語が４度用いられ、その後の雑誌記事や書簡にも散見される。

ナビ派に関する美術史研究は、アラベスクにマニフェスト的な意義を見出し、彼らの制作の根拠としてドニの著述を重点的に参照してきた。看過すべきでないのは、それらの研究に認められる次のような傾向、すなわちアラベスクが持つ 19 世紀末的文脈として総合芸術や照応（Correspondances）の思想を重視する傾向である。アラベスクは「アラブ風」の装飾文様を語源とするが、主に 18 世紀以降、自然模倣の拒否や空想などの性質が抽出され、文学論や音楽論へ拡大された。この観念化を踏まえ、例えばナビ派のモノグラフ執筆者 Clément Dessy は、アラベスクをいわゆる 19 世紀末象徴主義の芸術風土全体が共有した概念として論じている（2015, 2021）。そうした横断性を強調する視座において、ナビ派の絵画作品内の曲線は、芸術風土の証左や反映という副次的な位置付けを余儀なくされてきたのである。

しかしながら、観念化の一方で、アラベスクは装飾といういわば絵画の傍流として描かれ続け、その曲線の性質が議論されてきた。そして 19 世紀末は、装飾による美術の刷新が叫ばれ、絵画のヘゲモニーが揺らいだ時期でもあった。実際、ドニが「新伝統主義の定義」においてアラベスクへ言及する場合、いずれも彼自身や過去の画家の名、美術作品の例が伴う。つまり造形に対する問題意識に根ざした主張として読む必然性があるのである。

以上を踏まえ、発表者はアラベスクが持つ美術に固有の文脈に改めて着目し、ドニのアラベスク論を、彼への評価に用いられた語句「象徴的装飾（décors symboliques）」（Adolphe Retté, 1891）を手掛かりに再解釈する。その際、画家の主張を制作と著述の総体と捉え、主に 1890 年代前半の絵画作品と、私的な文書を含む同時期のテクストを分析対象に定める。これにより先行研究では見落とされてきた問題意識を前景化することが可能となる。結論として、ドニがアラベスクによって応答を試みた造形の諸問題は、「象徴的装飾としての絵画」への探究に収斂し、ゆえに作品の存在論の水準に位置するものであったことを明らかにする。